

その後の「も」

——「も」の意味を再考する——

沼田善子

0. はじめに

とりたて詞「も」については、沼田1986、1992等でその意味論的特徴および構文論的特徴について述べた。しかしそこでの考察は不十分な点があり、課題として残した問題もあった。「も」については従来から、既に多くの優れた論考があるが、1986年以降にも寺村1991、田野村1991、前田1991、山中1991a, b, 1993、立松1992、定延1993等の詳細な研究が発表されている。これらの研究から、沼田1986等の問題点に関し多くの示唆を得た。そこで本稿では、とりたて詞「も」およびとりたて詞以外の「も」の両方の観点から、改めて「も」という語について若干の考察を加えてみたい。

1. とりたて詞「も」

1.1. とりたて詞「も」の意味

沼田1986等ではとりたて詞「も」を、次の(1)～(3)の例にあげるような単純他者肯定の「も₁」、意外の「も₂」、柔らげの「も₃」と大きく3つに分け、それぞれの意味を(4)のように記述した。

- (1) 日曜日は、銀行も (郵便局も) 休みです。(も₁)
- (2) 彼は努力して、とうとうラテン語も (/さえ/まで) 理解できるようになった。(も₂)
- (3) a 春も たけなわになりました。(も₃)
- (4) 「も₁」：主張・断定・自者肯定
か つ
含み・断定・他者肯定
「も₂」：主張・断定・自者肯定

か つ

含み・予想・自者否定（沼田1986では「予想」を「期待」とした。）

他者肯定

「も₃」：主張・断定・自者肯定

か つ

含み・擬制・他者肯定

上の記述についての詳細は沼田1986等を見て戴くとして、ここでは、(4)について、以下の3点にしぼって述べることにする。

- ① 「も₂」の含みにおける予想について
- ② 「も₃」の含みにおける他者の扱いについて
- ③ 「も₁」「も₂」「も₃」の意味的連続性の扱いについて

1.2. 「も₂」の「含み」

まず、①について考える。山中1991a, 定延1993等では、本稿でいう意外の「も₂」に相当する「も」の用法について、「EXPECT 値（以下E値）のスケール」「命題成立可能性スケール」等を使って説明する。これらは、「も₁」「も₂」「も₃」の意味上の連続性を説明するために、「も」がとりたてる要素に対する話し手の主観的評価を、語用論的あるいは認知的観点から明示的に捉えようとしたものである¹¹⁰。

確かに、人間の外界に対する認知のあり方と具体的な言語の表現形式との関連を考える上で、「も」の意味を認知的観点から捉え、明示することは、「も」の意味記述自体にとどまらず、「も」の意味と他のとりたて詞や他の表現形式（条件表現等）の意味を認知的に関連づける可能性の点からも興味深い考え方であると思う。ただ、「も」の意味に対する山中1991a, 定延1993の記述には、なお問題が残るように思われる。

そこで、本稿では意外の「も₂」の意味は(4)に示したままとし、それと「も₂」に関わるいわゆる認知の枠組みとの関連を以下のように考える。

対象とするモノ（や事柄）の集合の個々の要素について、それを構成要素とする命題が成立するか否かを問う際、当該集合内の要素によって命題の成立しやすさの度合いがすべて同じでないと判断される場合がある。その場合我々は、一般的・個別的知識、状況、文脈等様々な情報から、それぞれの要素に対するその命題の成立しやすさの度合いが予測できれば、その度合いの高低に応じて、

当該の集合内の要素を序列化して把握することができる。例えば、

(5) Xが予選を通過する。

で、「A選手、B選手、C選手」という集合内の個々の選手がXに入る要素とする。この場合、文脈や状況その他の様々な情報から三選手に対して「予選を通過する」可能性の高低を $A > B > C$ のように予測できれば、その順に三選手に序列をつけ、選手全体を把握することができる。

こうしたことを認知的あるいは語用論的観点から明示的に捉えようとしたものにGivón1982, Akatsuka1985の‘epistemic scale’や坂原1986の「段階の前提」があり、これらに続いて山中1991aの「E値のスケール」や定延1993の「命題成立可能性スケール」が考え出された。そして山中1991aや定延1993では、この「スケール」と「も」の意味を直接的に結びつけて考える。また、山中1991a等より早く中川1982でも、「も」の意味記述に「タテのスケール」という考え方を用いている。

両研究では、「も」を用いた表現でスケール上最小の値をとるものについての情報を示す(本稿でいう「も₂」がスケール上最小値のものを「自者」とし、「自者肯定」を「主張」とする)だけで、それより大きい値を示すものに対する情報(本稿では「含み」における「他者肯定」)を同時に含意できるとする。また、問題とするものは、すべてスケール上に配置されることから、「他者」が複数のものの集合である場合、その個々の要素もまたスケール上に順に配置されるといわれる。

本稿でも「も₂」が、自者・他者に対する「自者否定」「他者肯定」の「予想」を、上のようなスケールを利用していることは、否定しない。ただ、「他者」とされるものが複数ある場合に、それらもスケール上に具体的に配置されることを「も₂」がその意味の上で問題にしているとは考えない。「も₂」が直接利用する(「も₂」による認知的フォーカスがおかれる)のは、スケール上の自者と他者の境界の部分だけだと考える。

例えば、

(2) 彼は努力して、とうとうラテン語も (/さえ/まで)理解できるようになった。(も₂)

のような例の場合、自者「ラテン語」に対する他者は、文脈に明示されない限り、「ラテン語」より「理解できるようになる」のが容易である言語と考えられる。それには例えば、「ロシア語」や「ギリシャ語」等を想定することができる。仮に「ロシア語」や「ギリシャ語」を他者として、その際「ロシア語」

や「ギリシャ語」についても、「理解できるようになる」コトについての難易の序列が問題になるかという、そうは考えられない。「も₂」は自者と他者の難易の差は問題にするが、他者の中の個々の要素の序列は問題にしない。

話し手や聞き手は、場合によっては「ロシア語」と「ギリシャ語」の難易について序列をつけている場合もあろうし、両者の難易には全く関心がない場合もあろう。実際に話し手や聞き手の間で、両者のどちらが難しい言語と考えられていようといまいと、それは「も₂」の意味には直接関係しない。どちらでもよいのである。

ちなみに、山中1991aでは、

(6) 今年の平安高校は強い。1回戦にも、2回戦にも、3回戦にも勝ち進んだ。

(7) あの先生には、課長も、部長も、専務も、社長もペコペコする。

の例で、「1回戦」「2回戦」「3回戦」や、「課長」「部長」「専務」「社長」のように、要素間の序列が内在的あるいは外在的にすでに存在する場合、「1回戦」から「3回戦」、「課長」から「社長」にいくに従って意外さが増すことから、他者の中の要素間にもE値の大小による序列があるとす。しかし、このことから直ちに、「も₂」が他者の要素間の序列づけをも問題にすると考えるべきではないように思う。

ここで仮に、山中1991aが言うように「も」の自者について意外さを感じ、それが後の要素にいくほど順に強くなるとすると、この文の「も」は「意外」の「も₂」ということになる。とすれば、(6)や(7)の各々の「も」の自者に対して、その他者の内容はすべて異なるはずである。先に見たように、意外の「も₂」の自者はスケール上最小値をとり、それ以上の要素はすべて他者となるから、他者は(6)や(7)の各々の「も」の自者より常にスケール上値の大きい要素すべてでなくてはならない。

例えば(6)では、「一回戦」にはもともと「勝ち進む」ことはないから他者が考えにくい、多分この文で「も」が利用するスケールとは、「出場する試合としての難しさの度合い」だろうから、そうだとすれば「不戦敗」あるいは「出場の申し込みをしないコト」になる。次に「2回戦」の他者は「一回戦」とそれ以下の状態「不戦敗」等、「3回戦」の他者は「2回戦」「一回戦」とそれ以下の状態と考えられる。つまり、3つの「も」の中、初めの「も」の他者は文中に明示されず、他の「も」は、一つ前の「も」が自者・他者とするもの全体を、改めて他者としているのである。これは(7)の場合も同様であ

る。

- (6) にもいえることだが、(7)も、
 (7') a あの先生には、課長もペコペコする。
 b あの先生には、部長もペコペコする。
 c あの先生には、専務もペコペコする。
 d あの先生には、社長もペコペコする。

のように、単独の「も₂」の文が重なって、重複構造^{註2}をなしたものと考えられる。ここで、a～dの「課長」～「社長」は、すべて「あの先生にペコペコすると予想される度合い」という同一スケール上に並ぶ要素である。また、この場合は「課長」～「社長」に対する外在的な順序がそのまま当該スケール上に反映される。^{註3}しかし、a～dのそれぞれの「も₂」がこのスケールのすべてを利用しているわけではない。直接利用しているスケール上の部分、いわば「も₂」のフォーカスはそれぞれの自者と他者の境界の部分だけに置かれる。もし、スケール上のすべてをフォーカスとすれば、(6)の場合と同じく、a～cの「も₂」には「スケール上最小値の要素を自者とする」ということが当てはまらなくなる。

そこで、(7')等の個々の文が重なって、(6)や(7)のように重複構造をとる場合には、直前の「も」が自者・他者に関してフォーカスを置くスケール上の部分を、すぐ後の「も」が取り消し、改めてその自者・他者に関し同一スケール上に新しいフォーカスを置き直していくと考えた方がよい。

その際、複数の「も₂」の自者がスケール上、値の大きい要素から小さい要素の順に並ぶのが、文全体の意味を理解するのに最も自然なあり方だろう。実際、(6)や(7)の文を次のようにすると、「も₂」の重複構造とは解釈しにくくなり、自然さも落ちる。

- (6'') ? 今年の平安高校は強い。3回戦にも、1回戦にも、2回戦にも勝ち進んだ。^{註4}

- (7'') あの先生には、社長も、専務も、部長も、課長もペコペコする。

また、(6)(7)ではフォーカスが置かれるスケール上の部分が、後にいくほど小さい値の部分へ修正されていくのだから、それに従って当然意外さも増すことになる。

このように見てくると、上に見たようなスケールと「意外」の「も₂」の自者・他者は、次のように考えることができる。

- (8)ア 「も₂」の自者と他者は何らかの同一スケール上にある要素である。

イ 「も₂」は当該スケール上の自者と他者の境界に認知的フォーカスを置き、自者となる要素を、他者となる他のすべての要素と、その境界で対立的に区別する。

(8)を沼田1986等の記述と関連させると、アは、自者と他者の同類性³⁵を認知的に保証するものと考えることができる。また、イは「も₂」の「含み」における「自者否定・他者肯定」の「予想」を認知的に捉え直したものだといえる。沼田1986でも述べ、また定延1993, p. 156でも再度述べられていることだが、「も₂」の「意外」の意味は、「主張」による、話し手もしくは聞き手の自者に対する予想（定延1993では「見込み」とされる）の否定が誘発する意味である。このことから、イの自者と他者の対立的区別で、境界を境に自者の側を「否定」の領域、他者の側を「肯定」の領域と考えるのは妥当であろう。山中1991b, p.p. 34~35も、同様に本稿の自者・他者の対立を真偽値の対立で捉えている。

ところで、山中1991a等では、「も₂」がスケール上最小値を示す自者を取りたてることで、同時に他者が肯定されることも含意されるという。しかし、「も₂」の場合とよく似た形で、この種のスケールを利用して自者と他者を捉えていると思われる「否定的特立」の「など」³⁶等の場合には、やはりスケール上最小値をとる要素を自者としてとりたてても、それが同時に他者肯定を含意することにはならないように思う。そこで、本稿ではイの段階で「他者肯定」の「含み」も成立するとは考えない。

また、山中1991aでは、「も₂」の「含み」における「他者肯定」は「さえ」と異なり、文脈により取り消すことができないとする。これは現象の観察自体が異なるので、これ以上議論はできないが、沼田1986等で述べてきたように、筆者の内省及び観察では、「も₂」の「他者肯定」の「含み」も文脈により取り消し可能である。

(9) …この頃の新入社員はちゃんと教育しないとエライことになる。

あの先生には、社長も気を使ってペコペコしているのに、新入社員が横柄な対応をして、涼しい顔をしているのである。

筆者の内省では、(9)は自然な文である。「意外」の「さえ」と比べ、「も₂」の「含み」の「他者肯定」を文脈による取り消しができないとする内省があるとすれば、それは「他者肯定」の「含み」が取り消し不可能な「単純他者肯定」の「も₁」の存在に影響されるためだとも思われる。しかし、いずれにせよ、(9)が自然な文とする内省を持つ人の言語では、「も₂」の「他者肯定」の「含み」

は取り消し可能となる。そこで、「も₂」の「含み」の「他者肯定」は「自者否定」と同じく「予想」としなければならない。さらに、この「予想」は先の(8)の内容とも合致するのである。以上のことから、結局「も₂」の意味は、認知的観点で(8)の内容を補記する他は、(4)に示したままでよいと考える。

1.3. 「も₃」の「含み」

次に②の「も₃」の「含み」について考える。

「柔らげ」の「も₃」の「含み」は沼田1983等では、(4)に示すとおり、「他者肯定」の「擬制」と考えた。つまり、他者は実際には存在しないのだが、「も₃」により、存在しない他者がさもあるかの如く感じられるようになると考えたのである。

「も₃」には、他者が具体的に何と特定できない場合があることは、松下1930、松尾1936、佐久間1940、永野1951、湯澤1954、工藤1964、宮地1967、此島1966、坂田1971、佐治1975(佐治1991にも所収)、高橋1978、寺村1991、定信1993等多くの研究が認めるところである。ただし上の研究は、この時の他者について、他者が不明確ではあるが存在するとする立場と他者は存在しないとする立場の二つに分かれる。湯澤1954(p. 695)は後者の立場であり、高橋1978(p. 26)も他者が存在しない場合もあることを認めているととれる記述がある。が、他はおおむね前者である。

沼田1986では、他者が常に特定できない点、そのため他者が何であるかは、解釈によってマチマチになる場合が多いこと、高橋1978(p. 26)_{註7}に言われるように、他者を想定することが難しい場合があることなどから、後者の立場をとった。しかし、本稿では、「も₃」の「含み」は特定できない他者の存在を示す、「不定他者」の「肯定」と修正したい。

他者が不定であっても存在するというには、他者を特に想定できない場合が問題になるが、これについては他者が言語化できないほど漠とした場合まで詳細に検討した定延1993の記述がある。

さらに、「も₃」が現れる文の文脈等の環境から考えた場合、特に時間的経過に関わる内容の文は、砂川有里子氏(個人的会話)によれば、次のように言える。「も₃」が現れる

(3) a 春もたけなわになりました。

(10) a 夜もふけて参りました。

のような文は、各々「春がたけなわになったコト」、「夜がふけてきたコト」を

積極的に伝えるというより、その後続く文を発話するためのいわば背景づくりをするといった機能を果たすものであることが多い¹⁸³。(3) a は

(3) b 春もたけなわになりましたが、その後、お変わりありませんか。
のように、その後相手の近況を問うような文を続ける、手紙文の冒頭に現れるのが典型的な現れ方であろう。(10) もやはり、この後を続けるよう頼むと、多くの人が

(10) b 夜もふけて参りました。みなさま戸締まり、火の元に気をつけてお休みください。

c 夜もふけて参りましたので、そろそろこの辺でお開きにしたいと思
います。

というような文を続けやすい。

(3) b や (10) bc の文では、表現する側は (3) a や (10) a の文の内容が特に伝えたいのではなく、むしろそれをふまえて「だからどうだ」と後の文を述べる呼び水的機能を果たさせていると考えられる。呼び水的機能とは、相手の近況を問う必要を自然に感じさせるためや、次にどうしてくれとか、どうしようとかと相手に行動を起こさせる理由づけを行うための時間的経過を、相手に十分把握させることである。それには、「春がたけなわになったコト」や「夜がふけたコト」を一件だけというより、「他にも、あれもこうだ、これもこうだ」と他に類似の事柄をいろいろ並べる方が効果がある。しかし、思いつくままに複数の事柄を羅列しなくても、「も」を使うことでそれが暗示できれば、その方が表現としては効率的だろう。また、そうすることで「春がたけなわになったコト」、「夜がふけたコト」自体は、他の類似の事柄の中に埋没してしまう。それが、(3) a や (10) a が「春がたけなわになったコト」「夜がふけたコト」を積極的に伝えず、後続文の背景となることを機能とすると考えられる所以となるのである。

さらに、(3) a や (10) a で「も」による自者と他者を考えてもらうと、自者を「春がたけなわになったコト」とし、他者を「それと同じように聞き手の身の上に起こった様々なコト」とか、「世間の移り変わり」とかと答える人がいるのも、上に述べたことと通じるものと思われる。

また、上に見たような場合「も」のスコープは、直前の要素「春」や「夜」ではなく、「春がたけなわになりました」、「夜がふけて参りました」全体になるから、沼田1986等で述べたBスコープ（後方移動スコープ）ということになる。沼田1986で述べたように、Bスコープは、とりたて詞の分布位置に関わり

なく、自者と他者の意味的な対応関係のあり方で決まるものだから、他者が存在しないので分布位置からしかスコープが判断できないとして、「も₃」にNスコープ（直前スコープ）しか認めない沼田1986等の記述では、現象が十分におさえられないことになる¹⁹⁰。

以上のことから、「も₃」の「含み」を修正し、全体の意味を次のように改める。

(11) 主張・断定・自者肯定

か つ

含み・断定・不定他者肯定

「も₃」の場合、話し手と聞き手が異なる他者を想定する可能性もあるが、話し手はそれを問題にしない。むしろ、話し手は聞き手に、聞き手なりの他者の想定を委ねているといえるかも知れない。「も₃」は、「不定な他者」の存在を暗示することで、表現する側の考えている以上に多くのことを解釈する側に他者として想定させたり、他者の想定自体を解釈する側に完全に委ねてしまうところがあるのである。寺村1991の「詠嘆」をはじめ、「も₃」の意味に「含蓄的表現」等を認める研究が多いのも、こうしたことからくるものではないだろうか。

このように見る限り、「も₃」の意味は必ずしも文意の「柔らげ」だけではない。その点でこの名称も不適當と言わざるを得ない。これに代わる適当な名称がないので、今のところ一応「不定他者肯定」の「も₃」と呼ぶことにする。

1.4. 「も₁」「も₂」「も₃」の意味的連続性

最後に③「も₁」「も₂」「も₃」の意味的連続性の扱いについて考える。山中1991 a, b 定延1993等は、沼田1986の記述では「も」の3つの意味の連続性が示されていない旨の指摘がある。これらの研究では、「も」の意味を「類似表現の存在」等、本稿でいう「他者肯定」の意味と基本的に同じと考えられる意味を典型的な意味として中核にすえ、他の意味は、文脈等に依存して派生する語用論的意味とする。

1語の異なる用法か、同音異義語かの識別の問題は難しい。まず、この点から考える。「も」においても、今のところ、どちらと考えるべきか判断のつきにくい点がある。そこで、積極的に主張するのではないが、一応のところ次のように考えておきたい。

とりたてて詞「も」に認める「も₁」「も₂」「も₃」は、同音異義語と考える。

(12) 太郎も医者になりました。

の文は、厳密にはこれだけで特に文脈を与えられない限り、スコープも決まらなければ、「単純他者肯定」の「も₁」、「意外」の「も₂」、「不定他者肯定」の「も₃」のいずれの意味にも解釈できない。

一般に(12)の場合、文脈を与えられなければ、「単純他者肯定」の「も₁」と解釈しやすい傾向がある。これは、「も₁」が、「も₂」や「も₃」と比べると共起する文脈に比較的制限や偏りが少ないこと、「も₂」については、類義語の「さえ」や「まで」が存在すること等様々な要因から、我々が経験的に、このような場合には「も₁」に解釈できる可能性が最も高いことを知っているためではないだろうか。それで、(12)を見て、この文の「も」を「も₁」だと、とりあえず判断するに過ぎず、実際厳密には(12)の文だけでは、この判断が正しいかどうかはわからないはずである。

また逆に(12)を見て、厳密に考えれば「も」に一定の判断がつけられなくなるのは、我々がこの「も」が「も₁」「も₂」「も₃」のいずれである可能性も等しくあることを知っているからである。

これは例えば、

(13) そばをみる。

(14) かみをすく。

の文で、これだけでは、「そば」や「かみ」の意味が「側」と「蕎麦」、「紙」と「髪」のいずれか判断できないのと、同様である。

ちなみに、(12)を「さえ」や「まで」の文に換え、

(12') 太郎さえ/まで医者になりました。

とした文が、意味上の曖昧さがないのは、「さえ」や「まで」にこの文の解釈に関わるような、同音異義語がないためと考えられる。

このように考えると、「も₁」「も₂」「も₃」のいずれか一つを「も」の意味とし他は文脈に依存して成立もしくは醸成される意味というようには考えにくい。

さらに、先に見たように山中1991a,b等の観察では、「も」による「他者肯定」の「含み」は、「も₂」においても取り消し不可能であったが、筆者の観察では取り消し可能である。このことから「含み」で「他者肯定」を「断定」し、これが取り消し不可能な「も₁」の意味を「も」の意味とか中核的意味とかとすることができないのである。

以上から、初めに述べたとおり、本稿では「も₁」「も₂」「も₃」を同音異義語

と考えようというのである。

ただし、「断定」とも「予想」とも決まる前の「他者肯定」の「含み」と、「自者肯定」の「主張」は、(4)に示すとおり、「も₁」「も₂」「も₃」に共通している。仮に、これを「も」の文脈に依存しない、形式自体が持つ意味とすれば、他の部分を文脈に依存して派生する意味に関わる部分と位置づけることができるかも知れない。「も₁」は、「含み」の「他者肯定」が文脈等の情報から、「断定」だと判断される場合、「も₂」は「含み」の「他者肯定」が「予想」となり、同時に「自者否定」の「予想」も「含み」に加わる場合、「も₃」は「含み」の「他者肯定」が「断定」となり、同時に「他者」が「不定」になる場合、のように考えるのである。

ところで、「も₁」「も₂」「も₃」の意味的連続性の扱いについてだが、沼田1986等では、「自者」・「他者」,「否定」・「肯定」,「主張」・「含み」,「断定」・「予想(1986の段階では「期待」とした)」の4組8個の基本的概念を意味特徴とし、三者の意味に共通する部分、異なる部分をこれらの意味特徴の組み合わせで明示しようと試みた。単に「単純他者肯定」「意外」「柔らげ」といった名づける捉え方のみにしなかったのは、こうした「も」の三者の意味だけでなく、他のとりたて詞の意味との連続性も、体系的に捉えることを目的としたからである。

2. 「も」と強調

2.1. 「南も南、赤道直下だ」の「も」

沼田1986等では、

(15) 南も南、赤道直下だ。

(16) 食いも食ったり、一人で十杯べろりと食べた。

等の文の「も」を慣用的用法として、とりたて詞「も」の考察から除いた。これらの「も」には「南」や「食い」の他者が考え難い。この「も」を、山中1991aでは「内部対照集合」を聞き手に想定させる「も」として、前節で見た他者が特定しにくい「も₃」の用法と併せ、これと同様の「も」の一用法と考えているようである。

山中1991aでは、

(17) 息子も3才になった。

(18) 我々がこの島にやってきたのは十月も半ばの週末であった。言い換えれば観光シーズン最後の週ということになる。

(19) 彼の店は東京も銀座だけ。

(以上 p 173)

等の例を加え、いずれも「内部対照集合」を想定させる「も」とする。これらの「も」が、「も」で提示した要素自身を、集合の上位概念として、その内部の要素を聞き手に想定させる。この集合を「内部対照集合」と呼ぶ。話し手は聞き手に内部対照集合を想定させることにより、1つから1つを同定するのではなく、多から1つを同定して、強調効果を狙う。」(p. 172) ものとする。

しかし、「も」が想定させる「内部対照集合」自体、また、それと関連する「多から一つへの同定」等ということが、筆者には十分に理解できない。

そもそも「も」は、自者と他者からなる同類の要素の集合が存在することを暗示するが、それだけでなく、基本的に自者も他者もある命題をみたく要素として同時に肯定する。例えば(18)で、もし「も」の自者と他者を「東京」という集合の内部要素である個々の場所、新宿、上野、葛飾等々と考えると、これらがすべて「Xが銀座である」コトに対して肯定され、「新宿も上野も葛飾も銀座だ」ということになる。また「多から一つへの同定」の「多」を「東京中の様々な場所」とし、「一つ」が「銀座」とすれば、やはり東京中の様々な場所が銀座に同定されることになる。しかし、これは明らかに無理がある。山中1991aも、このようなことを言おうとしたのではあるまい。だとするなら、「内部対照集合の想定」や「多から一つへの同定」ということ自体が、正確に述べられていないことになる。

またこれでは、「も」の文と並行現象が多い「は」の文、

(18') 我々がこの島にやってきたのは十月は半ばの週末であった。

(19') 彼の店は東京にある。東京は銀座だけ。

等の「は」との違いがうまく説明できないのではないか。これらの「は」に前接する「十月」「東京」にも、「十月には前半、中半、後半いろいろある中で」や「東京にもいろいろな場所がある中で」といった解釈ができ、その点ではいわゆる「内部対照集合」が想定できるだろう。また、「内部対照集合」の要素全体から「半ばの週末」、「銀座」といういわゆる「多から1つへの同定」も「も」の場合と変わらない。また(19')でも、「銀座」が「東京」の中でも特に賑やかな場所で、都市としての東京の賑やかさ、華やかさの点で言えば最も東京らしい場所の一つにあたるという知識があれば、(19)と同様のいわゆる「強調効果」が得られよう。とすれば、(19')の「は」にも「も」と同様の説明が当てはまることになる。従って「内部対照集合」等の説明では、この「は」との違いが説明できない。

逆に、(18')では仮に「多から一つへ同定」されていたとしても、「言い換えれば観光シーズン最後の週ということになる」という、「十月の半ばの週」の特殊性を明示するような表現がなければ、強調効果が必ずしも感じられない。

(17)でも、「息子が3才になった」コトに必ずしも強調は感じられない。

(3) a 春もたけなわになりました。

(10) a 夜もふけて参りました。

等、先に「も₃」の例として見た文も同様である。その点で(18')の「は」にも、また(17)の「も」にも「も₃」の例一般にも、「多から一つへの同定による強調効果」という山中1991aの説明は当てはまらないだろう。

ここで、(15)(16)に戻ろう。この「も」は「は」とは違う。(15)(16)の文が自然であるのに対し、「は」は

(15') ??南は南、赤道直下だ。

(16') ??食は食ったり、一人で十杯ぺろりと食べた。

のようには言いにくい。

また、(3) a は

(3) c 春も春、(春)たけなわになりました。

とすると「春である」コトが明らかに強調される。(10)も、

(10) d 夜も夜、深々とふけて午前2時をまわりました。

とすると「夜である」コトが強調される。というより(10) a の場合、

(10) e ??夜も夜、(夜が)更けて参りました。

のように言うだけでは自然でない。(10) d のように、明らかに「夜である」コトを強調する表現が伴わなければ不自然になる。つまり、(15)(16)等に見られる慣用的な「も」による同語反復には、常に強調効果が伴うのである。

こうした点で(15)(16)の「も」を、(17)～(19)等の「不定他者肯定」の「も₃」と同じものとするのにも無理がある。これらは区別して考えた方がよい。

さて、以上のことを踏まえて次では(15)等の「も」や(18)(19)の「も」と(18')(19')の「は」との関係について改めて考えてみたい。

2.2. 「江戸は神田の生まれだ」文と「も₃」

(18)(19)の「も」の場合について、改めて考えてみよう。

(18) 我々がこの島にやってきたのは十月も半ばの週末であった。言い換えれば観光シーズン最後の週ということになる。

(19) 彼の店は東京も銀座だぜ。

は、「も」を「は」に入れ替えて、

(18') 我々がこの島にやってきたのは十月は半ばの週末であった。言い換えれば観光シーズン最後の週ということになる。

(19') 彼の店は東京にある。東京は銀座だぜ。

としても文が必ずしも不自然にならないこと、また、その場合にも「十月」や「東京」の中にいわゆる「内部対照集合」が想定できることは、先にみた通りである。そこで、(18) (19) にいわれる「内部対照集合」も「も」によるものではなく、実は「も」が「十月」や「東京」をとりたてる前にすでに用意されているものと疑うことができる。(18') (19') の文をもう少し単純にして考えてみよう。

(20) 十月は半ばの週末だ。

(21) 東京は銀座だ。

(18') (19') で問題としたい「は」の部分に注目して、文を単純にすると(20) (21) の文になる。これらは、

(22) 京は三条の大尽殿に抱えられたる一寸法師 (三上1963, P213)

(23) 江戸は神田の生まれ (青木1992, P176)

等の「は」の例に類する文と考えられる。

こうした「は」は、松下1961, 三上1963, 管野1964, 大野1978, 青木1992等の研究がある中で、松下1961が「判断の結果の提示 (P346)」の「は」とし、三上1963が「は」による「の」の代行の一つとし、青木1992が「は」の前接名詞が「題目とは似て非なるもの (P182)」である特殊な用法としたものである。青木1992では、この「は」について「意味的に内省すればノで表される関係一全体と部分の関係一以外であり得ないものを、形の上で、即ち表現の上で、恰も題目であるかの如く、重く扱ったのである (P180)」といわれるが、筆者も、題目であるないの問題はまた別に考えるとして、「全体と部分の関係」という捉え方に賛成したい。

この「は」の用例は、三上1963, P213にもいわれるように地理に関わる内容の文が多いが、それだけではない。全体と部分の関係は、同じ場所という関係で広い場所から狭い場所というように限定されたものではなく、比較的緩やかに捉えられるようである。いわば「は」の前接名詞句で広い範囲が示され、後続する名詞句でその範囲の中の部分と捉えられるものが示されていけばよい。

- (24) 昭和は21年の秋、終戦の混乱が続く中、単身フランスに出かけた。
 (25) 昔昔、中国は唐の時代。(青木1992, p176)
 (26) 名古屋の金さんと銀さん、今日は、大相撲は横綱曙とデートができてご満悦です。
 (27) 真冬のロンドンは1月10日の早朝、フリーダ・クレグはリード氏からの突然の電話に呼び出された。

上の例の「は」も、ここで考える「は」と同様の例である。(24)は「昭和」が昭和の時代全体で「21年」(あるいは「21年の秋」)はその中の部分、(25)では、「中国」が中国の歴史全体を示し「唐の時代」はその部分、(26)は「大相撲」が大相撲の世界全体であり、「横綱曙」はその構成要素である力士の一人という部分と捉えることができる。(27)は、「真冬のロンドン」がロンドンの真冬のシーズンの時間全体を示し、「1月10日」がその部分と捉えることができよう¹⁰⁾。ただし、これはあくまで全体と部分の解釈の可能性の一つであり、これが絶対的ではない。人によっては、別の形で「中国」と「唐の時代」等に全体と部分の関係を認めるかも知れない。また、全体と部分の関係が認め難くなれば、他の解釈の可能性を探り、それが不可能ならば文自体の許容度も落ちるだろう。その点では(27)あたりになると、不自然さを感じる人があるかも知れない。

さて、ここでの本題に戻ろう。上に見たように(18') (19'), (20) (21)は全体と部分の関係にある名詞句と名詞句を結びつける「は」による文と考えられる。従って、これらの「は」に前接する「十月」や「東京」にも、後続の「半ばの週末」や「銀座」を部分として含む全体という読みが成立しているはずである。そのため、「十月」や「東京」にいわゆる「内部対照集合」が想定できたのである。

では、(18) (19)の文はどのように考えられるだろうか。

(18) (19)は、次の3点から、(18') (19')の「は」で示される名詞句が「も」によってとりたてられたものと考えたい。

まず第1に(18')同様、(18)の文も「言い換えれば云々」の部分を除いてしまうと、必ずしも強調は感じられない。(19)も「銀座」を「青梅の先」にして、

(19'') 彼の店は東京だ。東京も青梅の先でね、なんとかって名前の駅が近かったな。

のように言うことができるし、この時には「彼の店が東京の青梅の先にあるコ

ト」が強調されているとも思えない。(18) (19) では、「半ばの週末」や「銀座」が「十月」や「東京」の中でも、中心的であるとか、特に注目に値するとかいうように特徴づけられる特殊な部分要素でなければ、「も」があっても強調にはならない。つまり、強調と「も」は直接的には結びつかないのである¹¹⁰。逆に強調効果をもたらす「銀座」等に対する情報を除いてしまえば、これらのタイプの文にはむしろ、(3) a や (10) a, (17) も含め、すべて「も」があることで、不定の他者を肯定することによる「詠嘆・後続叙述に対する背景化¹¹²」いわゆる「柔らげ」あるいは「ぼかし」等の効果の方を感じる。

第2に、「も₃」の「不定他者肯定」は前接する名詞句と後続する名詞句の「全体・部分の関係」の読みを壊さない。(18) (19) 等の文では、「も」が「十月」をとりたてる以前に、これまで見た全体・部分の解釈により「十月」等のいわば内側に「内部対照集合」的解釈が可能になっている。一方、「も₃」は肯定する他者が不定であるから、「十月」や「東京」という自者に対して、それと対比的に対立する他者は具体的に特定されない。つまり、「十月」のいわば外側に、これと対比される他者を積極的に想定させるということがないのである。そこで、「十月」等を「も₃」がとりたてても、本来の「内部対照集合」的解釈がそのまま保たれると考えられるのである¹¹⁰。

第3に、(3) a (10) a (17) 等の文では「内部対照集合」的解釈はし難いが、これらは「も」を「は」に換えても、「は」が結びつける名詞句間に全体・部分の関係を読みとりにくい。

(3) d 春はたけなわになりました。

(10) f 夜は更けてまいりました。

(17) 息子は3才になった。

上でも(3) d はまだ、「春」と「たけなわ(の春)」を全体と部分として捉えることが可能かも知れないが、(10) f の「夜」には、部分にあたる名詞句がない。(17) の「息子」と「3才」を全体と部分の関係に読みとるのも難しい。これは

(28) 春はたけなわ3月3日、おひな祭りの夜のこと

(29) 夜は真夜中丑三つ時に、隣で何やら物音がする。

(30) 息子は3才のガキ大将「太郎」をつれたヨーロッパへの道中は悪戦苦闘の連続でした。

等の文と比べた場合との明らかな違いである。この点からも「内部対照集合」は「も」により想定されるものでないと思えるべきだろう。

以上の3点から、(18) (19) 等のタイプの文は、(18') (19') タイプの文の「は」に前接するような特徴を持つ名詞句を「も」がとりたてた場合と考える。

2.3. 「慣用的強調」の「も」

次に「も」の強調に関するもう一つのタイプ、(15) (16) 等の文について考えてみたい。

(31) 親分も親分、街道一の大親分。

(32) 打ったも打った、盛大な場外ホームランを打った。

(33) 泣くも泣いた。目が腫れ上がるほど思っきり泣いた。

等の文も(15) (16) の「も」の類例である。この場合の「も」は、後項の名詞句が省略されることはあるが、そうでない限り同語反復の形式で常に「親分であるコト」「打ったコト」「泣くコト」を強調する。この「も」を便宜的に「慣用的強調」の「も」と呼ぶことにしよう。この「も」には、上の他に、「よりもよって」や「そろいもそろって」等のように、かなり慣用化の度合いの強いものもある。

さて、これらは「食いも食ったり」「打ったも打った」「泣くも泣いた」等の形があることから見て、(15) の「南も南」等の場合も含め、単なる名詞句の「も」による同語反復の形式とは考え難い。(15) も

(15) 南 (であるの) も南 (である)、赤道直下だ。

のように、「も」は「南である」という文を「の」で名詞化したものと「南である」という文を結びつけていると考えられる。

ところで、(15) 等の文は次のような文とほぼ同義に解釈できる。

(15') 南だ、それも/しかも ただの南でなく、赤道直下だ。

(16') 食った、それも/しかも ただ食ったのではなく、一人で十杯ぺろりと食べた。

(31') 親分だ、それも/しかも ただの親分でなく、街道一の大親分だ。

(32') 打った、それも/しかも ただ打ったのではなく、盛大な場外ホームランだ。

(33') 泣いた、それも/しかも ただ泣いたのではなく、目が腫れ上がるほど泣いた。

上は、逆接の接続詞の用法とされることもある「それも」や「しかも」を用いた文であるが、これらの接続表現が上の文では、同語反復で強調を表す

「も」とほぼ同じ働きをしていると考えられる。では、これらの「それも」や「しかも」はどのような働きをしているのだろうか。

「それも」や「しかも」はまず、前文の「南だ」等を受け、この文を後の文に接続する。後の文は「単なる南ではない」と、いわば前文の平板的な叙述を否定し、「赤道直下だ」のような「そこまですとは思わなかった」という意外性の高い叙述を追加する文である。つまり、「それも」や「しかも」は、先行の文を受け、後行の文でその平板的な叙述を否定し、それを極端な、あるいは典型的なものとして改めて特徴づける。そして、全体で「南であるコト」を強調していると考えられるのである。

とすると、「慣用的強調」の「も」による表現も、前接する名詞句や名詞化した文による叙述を受け、それを後の文で極端なもの、あるいはそれらしい性質を最高に備えた典型的なものとして特徴づける形で叙述し直すという機能を果たすものと考えられる。ならば、「慣用的強調」の「も」にも一種の接続機能、しかも逆接的な接続の機能が認められるのではないだろうか^{注160}。

またこの「も」は、とりたてて詞の「も」のように、前接する名詞句を自者と考えた場合に、それに対する他者が不定なものとしても考え難い。

さらに、この「も」に関しては、「は」と置き換えると不自然になる。

(15') ??南は南，赤道直下だ。

(16') ??食いは食ったり，一人で十杯べろりと食べた。

先に見た「全体・部分」の関係の名詞句を「も₃」がとりたてたと考えられる文は、「も」を除いて、「も」がとりたてて前の文に戻そうとすると、「は」による文を考えることができ、「も」と「は」の差はあるものの、文が不自然になることはない。しかし、この場合はそれができない^{注17}。

前節で(18)等の例を通して見たように、「は」の文を元にして、「は」に前接する名詞句を「も₃」がとりたてたというような見方はできないのである。勿論、この「も」は「は」以外の語とも置き換えることができない。ここには「も」しか入らないし、「も」がなければ

(15'') *南~~は~~南，赤道直下だ。

のようになり、口頭語の省略された表現と考えない限り、非文と判断される。つまり、この「も」には、ここに見る限り任意性が認められないのである。

こうしたことから、「慣用句的強調」の「も」は、とりたてて詞ではなく、接続機能を持つ別の語だとも疑えるのである。

「も」にはかつて、塚原1969、小林1970、青木1971、内尾1973、安田1977等

に中世、鎌倉期以降に定着したといわれる「逆接接続助詞」の「も」があった。

(34) 人はいみじくたけも、力及ばぬことなり (愚管抄)

(35) 同じ御子像王をこそ立てられしも、また捨てて自ら位に即き給ふ

(神皇正統記)

等の「も」がその例とされるものであるが、これは、現代語にはほとんど残っていない。しかし、わずかに「はかなくも美しく燃え (= はかないが美しく燃える)」や「貧しくも心正しい人 (= 貧しいが心正しい人)」等のような文に残り、また、文語的な古い言い方を意識して使う場合に、

(34) 2 敗の貴ノ花。土つも、まだ綱とりの望みは残る。

のように使われることはある。実は「慣用的強調」の「も」は、この「接続助詞」の「も」と関係があるのではないかと疑うのである。

ただ、この「慣用的強調」の「も」に前接するのは上に見たとおり、あくまで名詞相当の語である。形容詞等が前接する場合も、

(34) 静かも静か、物音一つしない。

(35) 早いも早さ も早い、人間が一日かかる計算を5分もあればやってのける。

のようになるのである。そこでこの「も」を、文と文を接続するいわゆる「接続助詞」とするには抵抗がある。

また、「慣用的強調」の「も」の文も、複数重なり

(36) 食いも食った、一人で10杯。飲みも飲んだ、1升5合。

(37) 早いも早い、一分あればできるし、正確も正確、間違いはまず見あたらない。

のようになると、「食い」と「飲み」、「早い」と「正確」が互いに「も」によってとりたてられる自者であり、他者である関係にあるともとれるようになる^{注18)}。

通事的に見ても、同語反復で強調を示す「も」の用例としてあげられるのは湯沢1954、1981等の

(38) ラホヘ (覚え) モラホヘタリ、云モ云タリソ (史記抄2・周本紀)

(湯沢1981, p. 323)

(39) あきれもあきれたが、感心も感心だ (浮世床、二下)

(湯沢1954, p. 327)

のように、他者との対比的関係が読みとれる語に「も」がつく例か、

(40) さうさ、痛はしさも痛はしいネ (浮き世風呂、前上)

(41) いろいろ書いておるだろうから、見たさも見たいが泪のたね。

(娘節用, 九, 一二ウ) (以上湯沢1954, p. 327)

のような例で、表現上対比的他者がなくても、(15) (16) の例のように完全に他者との対比的関係を失い、さらに、後続の文で改めて特徴づけをするような形にはなっていないものである。ただ、ここで考える「慣用的強調」の「も」は、用例等のあり方から見て、やはり(40) (41) のような例を元にしたものというように考えるのがよいように思われる。

このように見ると、現代語の「慣用的強調」の「も」は、いわゆる「接続助詞」的特徴と、とりたて詞的特徴をどちらも不完全に併せ持つものと見ることができるとも知れない。

なお、「慣用的強調」の「も」による同語反復は、後項が省略されることがある。

(42) この部屋は、北も (北), 真北の一番寒い部屋だ。

(43) ああ、迷惑も (迷惑), 大迷惑だ。

(44) あの人は正直だ。正直も (正直), しまいには上に馬鹿がついて、他人があきれる始末だ。

(45) 夜も (夜), 真夜中の3時過ぎです。

のような例で後項の「北」や「迷惑」等が省略される場合である。この場合は、形の上からだけでは、先にみた「全体・部分」の関係にある名詞句を「も」等がとりたてた場合と見分けがつかない。先に見た(18) (19) や、「も₃」の用例が、強調と結びつけて考えられ易いのは、逆に見ればこのためだろう。しかし、これまでの考察に示す通り、これらは別の「も」による文が、たまたま表現上同じ形になっただけのものと見る。

3. まとめ

本稿では、沼田1986等のとりたて詞「も」について、その意味記述の問題点に改めて考察を加えた。またそれと関連して、「も」をめぐる強調表現について「部分・全体」の関係にある名詞句を「不定他者肯定」の「も₃」がとりたてると、場合と、「慣用的強調」の「も」による同語反復の場合とに分けて考えた。

しかし、本稿では十分な考察ができなかった問題も残った。とりたて詞「も」の意味に関しては、沼田1986等で、「も₃」が数量をとりたてるとした場合については全く触れられなかった。本稿の考察に関連して、いわゆる「主題」や「主

題」を示す「は」と、とりたて詞「も」の関係、さらにこれらととりたて詞全体の関係を考える必要があるがこれについても触れることができなかった。さらに、これに関連して、述語を中心とする命題の中側に関わるとりたて詞「も」と、命題の外側で機能する「も」についても、文副詞等の現象を含めて考える必要がある。すべて、今後の課題とする。

補注

- 1 「E値のスケール」「命題成立可能性スケール」の詳細については、山中1991a、定延1993等を参照。
- 2 「も」の重複構造の詳細については、沼田1986を参照されたい。
- 3 語の意味自体に備わる内在的・外在的序列が、この種のスケールに直接反映しない場合に関しては、定延1993 p. 151を参照。
- 4 (6')の場合、「も」がなくても「3回戦に勝ち進んだ」ということで、「2回戦等に勝ち進んだ」ことは含意されるので、「単純他者肯定」の「も」と解釈しても、なお自然さが落ちる。
- 5 自者と他者の同類性については、沼田1986, p.p. 133~143を参照されたい。
- 6 詳しくは沼田1986, 1988等を参照、ただし、「など」に関する本稿と同様な方向からの検討は、ここではなされていない。別稿で改めて検討したい。
- 7 高橋1978では、「王もついに756本うったね。」という文について、「王貞治がホームランの数における世界新記録をつくったのであって、この文は、だれかと同類であることを意味していない。この「王も」について数人に説明をもとめたら、各人各様の解釈があらわれ、共通点は、けっきょく、「王は」とくらべて、なんらかの含蓄がこめられているということであった。」とのべ、こういう場合は「妥当領域（「他者」とほぼ同じものと考えられる）が想定されているかどうかもわからないもの」とする。
- 8 これは、「春はたけなわになりました」や「春がたけなわになりました」の文とは対照的である。
- 9 とりたてのスキームの詳細については、沼田1986を参照されたい。また、「も」のスキームの解釈の傾向には、文脈だけでなく、「腹も立つ」等のような固定連語の名詞であったり、「サービスもここまでいくと行き過ぎだ。」や「東京も下町に行くともまだ江戸情緒が残っている。」「娘も17, 8になると、随分生意気な口を利くようになる。」のように、統語論的な構造から見て、主題の位置にあると考えられるような名詞等のように、「も」が後接する文中の要素の特徴からも手がかりが得られる場合があるが、この問題についての検討は別稿に譲る。
- 10 三上1963等が、この「は」を「の」の代行と考えたのも、全体と部分の関係がこのような緩やかに捉えられることに関係すると思われる。というのも、「の」が文脈により、うなぎ文の「だ」と同様に様々な意味解釈の可能性を持つのは、奥津1978等に指摘されるところである。一方これらの「は」によって結びつけられる名詞句と名詞句の意味関係は全体と部分というだけで、具体的には様々な場合がある。とすれば、こうした名詞と名詞を「は」ではない語で結びつけ

ようとする、それが可能なのは「の」しかないのである。

- 11 ただし、(19)等は「東京1も東京2、銀座だ。」の「東京2」が省略されたと考えられる文は、ここで見るタイプの文とは異なる。この場合の強調は慣用的「も」の用法によるもので、これについては後述する。
- 12 テレビ等でレポーターが、レポートの初めに「今日、私は、千葉県は銚子市にやってきました。」のようにいうことがあるが、これは「は」を「も」に換えると不自然になる。これは「も₃」の表現効果の一つ、後続叙述のための背景づくりと関係する現象と考えられる。談話の初めに、これから展開される談話の場面を設定する際には、自分のいる場所等は特に重要な情報として積極的に相手に伝えられるものである。他の情報の中に埋没させて、何となく示されればいいものではない。しかし、これに「も₃」をつけて、同時に肯定される不定他者を想定させながら示したのでは、情報自体がむしろ後続叙述に対して背景化してしまい、表現効果としては逆になる。そのため、こうした状況では、このタイプの文に「も」が使えないものと思われる。
- 13 「も₃」同様、他者が特定できないものとして沼田1986等では「柔らげ」の「など₁」をあげたが、「など₁」にこのようなことはない。「など₁」と「も₃」の違いの一つだが、これは「など₁」の意味を見直すべきものとする。が、この点については改めて別に考える。

また、他のとりたて詞「だけ」や「さえ」等、特定の他者が自者に対比される場合は、とりたて詞による自者・他者の対比的対立の陰に隠れて、名詞句間の「全体・部分」の解釈が打ち消されるか、でき難くなる。

そこで、

(1) ?我々がこの島にやってきたのは十月だけ半ばの週末だ。

(2) ??東京さえ神田だ。

とすると、「十月」以外の他の月との対比で、例えば「島にやってきたのは、十月だけは半ばの週末だが、11月12月は前半の週末だった」とでもいうような解釈しかできなくなる。(2)は、よほど特殊なウナギ文の解釈でもしなければ、非文と判定されるだろう。

- 14 本稿では、ここでの「は」に前接する名詞句を主題と考えてよいかどうかについては、保留する。
- 15 『日本国語大辞典』1974 小学館 p1182「それも(接続詞的に用いて)前の事柄に対し、後の事柄が反対、対立の関係にあることを示す。それでも。そうであっても。」の記述がある。また、同書では、「しかも」は添加の接続詞とする。
- 16 これについては、松下1961, p.p. 350-351に「判断価値の再判断」という興味深い記述がある。

ただし、ここでは、「慣用的強調」の「も」を、「提示助辞」の「も」の特殊な用法として説明している。また、「判断価値の再判断」を「私の店は東京も銀座の真中です」の「も」の場合にも当てはめる。しかし、この場合は「東京」が「東京だ」と考えた判断の価値というほどのものではなく、「全体と部分」の前接で見た名詞句間の全体と部分の関係で説明できると考えられる。この点で、

松下1961の記述がすべて支持できるわけではない。

- 17 松下1961等では、こうした「も」に対し
 (1) 上手は上手だがまだ素人ばなれがしない。(p. 347)
 等の「は」の例と対照し、「は」と「も」の違いを説明する。この部分の松下1961の記述には、疑問もあるが、本稿ではこれ以上考察を進める余裕がない。
- 18 「も」による同語反復の形式は「慣用的強調」の「も」の場合ばかりではない。
 (1) 親が親なら、子も子だ。
 (2) 相手も相手だが、お前も悪い。
 (3) サービスは一流だが、値段も値段だ。
 (4) 郊外の一戸建てになると、広さは広いが、遠さも遠い。
 (5) 1千万からの品物になると、立派も立派だが、高いも高い。
 のような例もある。これらの「も」は松下1961, p.p. 349-350にもあるとおおり、「慣用的強調」の「も」とは違う。これらの例については、益岡1991に言われる対立主題の問題等、とりたて詞と主題の関わりについて考えるべき問題があるが、本稿ではその余裕がないので、別稿で改めて扱うことにする。

引用文献

- 青木玲子 1971 「に」、「も」『日本文法大辞典』松村明編 明治書院
 // 1992 『現代語助詞「は」の構文論的研究』笠間書院
- 内尾久美 1973 『助詞の変遷』『品詞別日本文法講座 助詞』明治書院
- 大野 晋 1978 『日本語の文法を考える』岩波新書
- 奥津敬一郎 1978 『「ボクハウナギダ」の文法 くろしお出版』
- 管野 宏 1964 『東京は神田の生まれ』『口語文法講座3 ゆれている文法』明治書院
- 工藤美沙子 1964 『ハトモ』講座現代語6 口語文法の問題点。明治書院
- 此島正年 1966 『国語助詞の研究・助詞史素描』桜楓社
- 小林好日 1970 『日本文法史』刀江書院
- 坂田雪子 1971 「も」『日本文法大事典』松村明編 明治書院
- 佐久間鼎 1940 『現代日本語法の研究』厚生閣
- 坂原 茂 1986 「さえの語用論的考察」昭和60年度科学研究費補助金一般研究(B)研究成果報告書
- 佐治圭三 1974 「現代語の助詞「も」——主題、叙述(部)、「は」に関連して——」『女子大文学国文編』26 大阪女子大学 (『日本語の文法の研究』ひつじ書房 再録)
- // 1985 「「は」と「も」——係助詞、副助詞、前提助詞——」『日語学習与研究』1985年4、5号 (『日本語の文法の研究』ひつじ書房 再録)
- 定信利之 1993 「心的な情報処理操作と用法の派生——モをめぐる——」『高度な日本語記述文法書作成のための基礎的研究』平成4年度科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書 代表 益岡隆志
- 高橋太郎 1978 「も」によるとりたて形の記述的研究」『研究報告集』1 国立国語研究所

- 立松喜久子 1992 「共感の「も」の用法について」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』15
- 田野村忠温 1991 「「も」の一用法についての覚書——「君もしつこいな」という言い方の位置づけ——」『日本語学』10-9 明治書院
- 塚原鉄雄 1969 「四——も——接続助詞〈現代語〉」『古典語現代語助詞助動詞詳説』松村明編 学燈社
- 寺村秀夫 1991 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 中川正之 1982 「中国語——とくに助詞「も」に対応する一音節副詞をめぐって——」『講座日本語学』11 明治書院
- 永野賢 1951 「現代語の助詞・助動詞——用法と実例——」『国立国語研究所報告』3
- 沼田善子 1986 「第2章とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
 // 1992 『セルフマスターシリーズ5 「も」「だけ」「さえ」など——とりたて』くろしお出版
- 前田弘幸 1991 「数量の小量性を強調する「も」について～尺度の無標方向性および否定の働き～」『女子大文学（国文篇）』大阪女子大学国文学科紀要42
- 益岡隆志 1991 『モダリティの文法』くろしお出版
- 松尾捨次郎 1936 『国語法論巧』文学社
- 松下大三郎 1961 『標準日本口語法』白帝社
- 松下大三郎 1978 『改選標準日本文法』徳田政信編 勉誠社
- 三上章 1963 『日本語の論理』くろしお出版
- 宮地敦子 1967 「も」『国文学』42-1 学燈社
- 安田章 1977 「6. 助詞」『岩波講座日本語7 文法Ⅱ』岩波書店
- 山中美恵子 1991a 「「も」の含意について その1 ——「対照集合」「EXPECT 値」「内部対照集合」——」『日本語・日本文化』17, 大阪外国語大学留学生別科・日本語科
 // 1991b 「「も」「でも」「さえ」の含意について」『日本語と中国語の対象研究』14 日本語と中国語対照研究会編
 // 1993 「現象—対比—主題——その関連性の解明に向けての覚え書き——」『高度な日本語記述文法作成のための基礎的研究』平成4年度科学研究費補助金総合研究（A）研究成果報告書 代表益岡隆志
- 湯沢幸吉郎 1954 『江戸言葉の研究』明治書院
- 湯沢幸吉郎 1981 『室町時代言語の研究』明治書院
- Akatsuka, N. 1985 "Conditionals and Epistemic Scale Language vol. 61 No. 3
- Givón, T. 1982 "Evidentiality and epistemic space Studies in Language 6. 23-49.